

学位請求論文要旨

グロリア・ネイラーにおける環境意識の軌跡

ーエコクリティシズム及びエコフェミニズムの観点から

2019年1月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

田中 都

グロリア・ネイラー(1950~2016)は日本でもよく知られているトニ・モリスンやアリス・ウォーカーより少し遅れて、1980年代に登場した黒人女性作家である。ネイラーが先輩作家と異なるのは、環境運動が顕在化するようになった時期にその空気に触れつつ執筆していたことで、当然、そうした動きはネイラーにも影響を与えずにはおかず、実際、彼女の作品には明白に環境に対する強いこだわりが感じられる。彼女の環境意識が作中にどのように反映されているかを、いわゆるエコクリティシズムとエコフェミニズムの視点から考察することがこの論文のねらいである。

周知のように、20世紀後半には、科学技術の発展により世界経済が大きく成長した。だが、経済成長を優先したことで、公害の発生や様々な地球規模の環境問題が深刻化したことも事実である。そのような環境問題への危機意識は当然、文学にも影響を及ぼすこととなり、エコクリティシズムと呼ばれる批評の方法が登場する。近年の文学研究では、人種・階級・ジェンダーなど人間社会の関心事が主たる対象とされてきたが、シェリル・グロトフェルティは1990年代に発表した『エコクリティシズムリーダー』において、環境問題も避けられない社会的現実であるというスタンスから先の三つの視点に「環境」も加えて文学批評の必要性を提唱するようになった。従って、エコクリティシズムとは、環境と文学の関係を幅広く研究し、そこからエコロジーの視点をも文学研究に取り入れる批評であると言える。さらに、1980年代のアメリカでは黒人を始めとするマイノリティの環境保護を訴える「草の根運動」が「環境的人種差別」反対の声をあげはじめ、また同時期にそれをフェミニズムにつなげる動きも顕在化し、いわゆるエコフェミニズムの運動も盛んになったというわけである。

本論文は、以上のような批評の潮流を踏まえつつ、ネイラーの主要作品に黒人女性としての環境意識がどのように反映されているかを読み取ろうとするものである。マイノリティの視点に焦点を合わせるエコクリティシズム的研究は新しい試みと思われる。なぜなら、エコクリティシズムは白人作家たちを中心に広まったもので、マイノリティや有色人種などを扱うものは少ないからである。

実は、ネイラーも概ね環境問題を意識して取り上げた作家とはみなされていない。しかしながら、先にも触れたように、20世紀後半の草の根環境保護運動は女性たちの間で盛んであったという状況から、ネイラーも環境問題には無関心ではいられなかったと見るべきだろう。ネイラーの作品中、ブラックフェミニスト及びエコフェミニストとしての両側面がどのように結び付き、発展していったかを解明して行く。

本論文が取り上げるネイラーの主要三作品はいずれも1980年代のものである。まず1982年『ブリュースター・プレイスの女たち』、次いで1985年『リンデン・ヒルズ』、さらに1988年『ママ・デイ』と続くが、本論文ではとりわけ『ママ・デイ』の分析に重点を置き、ネイラーの環境意識への流れを読み取りたい。

ネイラーに関する先行研究は相当数存在する。だがそのほとんどは人種やジェンダーに関連する分析であり、エコクリティシズム的観点からのものは多くはない。日本の先行研

究のうち、最も意義深いものが、風呂本惇子が上記の三作品の各々を地形―「袋小路」、「V字型」、「島」―に焦点を合わせつつ取り上げた論考である¹。実のところ、本論文で地形を取り上げるに至ったきっかけは、この論文によるところが大きい。だが風呂本論文では触れられず、本論文で詳しく考察しようとしたことは、ネイラー作品における「地形」と女性のコミュニティとの関係をエコクリティシズムでの主要概念たる「場所の感覚」と連動させて論じるということである。

「場所の感覚」は山里勝己の定義に従うと「ひとつの場所を、その生態系などの自然環境だけでなく、歴史や文化をも含めた複合体として深く理解することを示唆するもの」である²。なお「場所の感覚」の原語は“Sense of Place”である。

すでに述べたように、本論はエコクリティシズムに立脚した文学研究だが、ここで言う「場所の感覚」の概念がどのようなものであるかをより明確に述べておくと、まずその提唱者の一人として知られるウォーレス・ステグナーは、「場所の感覚」とは一朝一夕に得られるものではなく、その土地に根を下ろしている共同体や家系の中で生活をし、その場所に関する知識を深め経験を積み重ねていくことで獲得されるものであるとしている³。つまり共同体（コミュニティ）内で時間をかけて定住することで「場所の感覚」は身につけられるというのだ。そのようにいわば定住志向型とも呼ぶべき「場所の感覚」に対し近年、疑義が呈されるようになってきているが、本論ではステグナーをはじめ、ゲーリー・スナイダー、ウェンデル・ベリーらの定住に基づく「場所の感覚」に依拠しつつ論をすすめていきたい。

トニ・モリスンは、女性と「場所の感覚」との結びつきに関して、ロバート・ステップトウによるインタビュー(1976)において、“a very strong sense of place”あるいは“a woman’s strong sense of being”と述べているが、これは女性が自己の存在感を保てる場所が台所、ポーチなど家の中であることを強調するものと捉えられる。この考えに従えば「場所の感覚」とは、ある特定の場所で自己の存在感を自覚することを意味するだろう。

以上、本論文の主要な狙いと概略を述べてきたが、次に各章の狙いを紹介していく。本論文は五つの章で構成されている。第一章では、ネイラーの場所への興味がどのように育っていったかを、ベトナム戦争、女性解放運動、公民権運動、キング牧師暗殺など当時の社会的変動と合わせて考察する。次いで彼女が作品上で設定した舞台としての「袋小路」「V字型」「島」などの地形的な特徴に目を向け、その各々に住む黒人たちのコミュニティ意識に各地形がどのような影響を与えているのかを考察する。さらにそれぞれの地形が独自の「場所の感覚」との間で示す相関関係を見ることで、果たしてそこにはコミュニティと呼べるものが存在するのかを明らかにし、その後スナイダーのいう「場所の感覚」を得るための三つの要素、すなわち、気候パターン、地形、土地の植物への理解、という観点を基に、とりわけ『ママ・デイ』における「島」の地形が「場所の感覚」を獲得するのにいかに適しているかを明らかにする。一般に、環境との結びつきを基に形成されるアイデ

ンティティ意識は、エコロジカル・アイデンティティと呼ばれるが、この章では「場所の感覚」がエコロジカル・アイデンティティにとっていかに中核的な意義を持つかをも示したい。言い換えれば、「場所の感覚」が修得されていなければエコロジカル・アイデンティティも形成されないとの考えからである。最後の第四節では、それぞれの場所におけるエコロジカル・アイデンティティの形成を具体的な黒人の食べ物との関連で考察する。黒人が何をどのように料理し食べているのかを黒人それぞれが住む場所や環境に関連づけて論じる。例えば、黒人中産階級が住むリンデン・ヒルズでは黒人の白人化が進行しているため、「場所の感覚」は成り立ちえず、従って黒人としてのエコロジカル・アイデンティティは育ちえないともみられるのだ。

第二章「黒人女性の場所移動」では、まず第一節で主に「移動」をキーワードに、場所から場所へと移動する黒人たちにとって、「場所の感覚」がどのように養われたのかを考察する。その過程で果たして「場所の感覚」は人の一生のうちに一度だけ固定されるものなのか、定住したり移動したりする生活の中で種々変化するものなのかを、テキストに沿って検証する。第二節では、とりわけ南部から北部へと移動の多い黒人が、移動に際し五感の中でもとくに「嗅覚」がどのように作用して場所の認識を可能にするか考察する。

第三章では『ママ・デイ』を中心に論じる。まず第一節ではネイラーが性差別と人種差別を脱構築させることで『ママ・デイ』の島という大きな場所に主人公がいかに居場所を見つけるに至っているかを探求する。そのため先ず、『ママ・デイ』にみられる「女性化された場所」の意義を問う。黒人女性の居場所とは一般に台所、ポーチ等家の中であると言われているが、ネイラーは女性の居場所を拡大させるべく、女性だけの場所として「島」を設定することで大きな場所を女性化することを試みている。たが、私見では結局その企てはかなわないものとされている。第二節では、『ママ・デイ』の黒人女性たちが生活に必要としていた家庭薬としての薬草について、エコフェミニズムの観点から論じる。第三節ではテキストに見られる薬草を使う現場とその薬効が信憑性のあるものかどうかを検証する。そのプロセスでネイラーが多様な薬草を通じて描いている自然との共生的生活が黒人女性のコミュニティに確かに生きていることを確認させることになったことを明らかにする。

第四章では、ネイラーの作品を「環境正義」という概念に沿って分析するが、その前にまず、エコフェミニズムを基盤として「環境正義」の定義を示しておく、この概念は元来、環境的人種差別を解消すべく誕生したものだが、現在ではジェンダー、セクシュアリティ、国籍、年齢、地域等、多様な視点と関わるものとされている。現実には黒人女性の多くが環境的には安全ではない場所に生きることを迫られる状況に置かれることで、「環境的人種差別」に晒かされている現状を明らかにする。然る後に、ネイラー作品において「環境正義」に関わる問題がどのように描かれているかを示す。環境的人種差別に始まった環境正義の問題は、時代と共に環境格差の問題に焦点を合わせるようになっていくが、特に『リンデン・ヒルズ』においては、中産階級の黒人同士の格差社会がいかに顕在化さ

れているかを検討する。

終章では、ネイラー作品を環境文学として位置づけることが可能なこと、またエコクリティシズムの観点からの分析が妥当であることを強調するとともに、今後の課題がどのようなものかを挙げて行きたい。

注)

¹ 風呂本惇子「グロリア・ネイラーの世界—黒人社会の肖像」『黒人研究 60 号』1990 年 33) ネイラーは黒人コミュニティに関心があったが、視覚的に違いのある地形とコミュニティの関連を取り上げている(33)。

² この定義は山里勝己「場所の感覚」文学環境学会『楽しく読めるネイチャーライティング』ミネルヴァ書房 2000 年 246 によるものである。

³ ウォーレス・ステグナー、「場所の感覚」結城正美他訳『フォリオ a』ふみくら書房 1993 年 115 頁